

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-03

競技者を対象としたコレクティブ・エフィカシー増強プログラムの開発

ARAI, Hirokazu / 荒井, 弘和

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2012-04

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 4月 2日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21700637

研究課題名（和文） 競技者を対象としたコレクティブ・エフィカシー増強プログラムの開発

研究課題名（英文） Development of enhancement program for collective efficacy among athletes

研究代表者

荒井 弘和 (ARAI HIROKAZU)

法政大学・文学部・専任講師

研究者番号：30419460

研究成果の概要（和文）：研究1では、コレクティブ・エフィカシーを評価する尺度を開発し、信頼性・妥当性を確認した。研究2では、コレクティブ・エフィカシーの関連要因を検討した。探索的に実施した研究3では、ファシリテーションプログラムが、コレクティブ・エフィカシーを増強する可能性を確認した。追加で実施した、コレクティブ・エフィカシーの増強方略を収集した調査の成果も踏まえて、研究4では、コレクティブ・エフィカシーを増強するためのプログラムが備えるべき要素を提示した。

研究成果の概要（英文）：In study 1, I developed a collective efficacy scale and I confirmed reliability and validity. In study 2, I investigated correlation factors of the collective efficacy. Next, in study 3 that is exploratory study, I identified a facilitation program would enhance the collective efficacy. In keeping with an additional study that is to collect enhancement strategy of the collective efficacy, in study 4, I suggested the factors that should be included in the collective efficacy enhancement program.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、スポーツ科学

キーワード：スポーツ心理学、チーム

1. 研究開始当初の背景

(1) セルフ・エフィカシーとコレクティブ・エフィカシー

現在、わが国のスポーツ振興基本計画の柱の1つに「国際競技力の向上」が挙げられている。そのための施策として、スポーツ医・科学の活用が強調されている。2008年に行われた北京オリンピックにおいても、チームスポーツにおけるわが国のメダル獲得はソフ

トボールのみであり、チームスポーツの強化が急務であると指摘されている。そのため、競技場面におけるチームに関する科学的研究の実施が期待されている。

チームスポーツでは、個人だけの成功が必ずしもチームとしての勝利に結びつかないことがある。これは、チームスポーツが単に個々の競技者が集まったものである以上に、「チームとしての力」が働く集団であること

による。ラグビーで用いられる、One for all, all for one (ひとはみんなのために、みんなはひとりのために) というフレーズに代表されるように、競技者は、自らが属するチームに影響を与え、そのチームから自らも影響を受ける。

Bandura (1997: Self-efficacy: The exercise of control) は、チームにおいて共有される、固有の課題を遂行する能力の認知をコレクティブ・エフィカシー (collective-efficacy) として提示している。Zaccaro et al. (1995: Self-efficacy, adaptation and adjustment: Theory and application) によれば、コレクティブ・エフィカシーとは、「特定状況の要求に対してうまく提携された反応における資源を配置し、調整し、統合する時に、個人に共有された集合的な有能感」である。Lochner et al. (1999: Health and Place, 5, 259-270) によれば、コレクティブ・エフィカシーは、セルフ・エフィカシー (self-efficacy) と同様に、状況固有であり、一般的なものではない。多くの研究によって、コレクティブ・エフィカシーはチームの成果に影響を与えることが示されている (Tasa et al., 2007: Journal of Applied Psychology, 92, 17-27)。

(2) コレクティブ・エフィカシーの評価と課題

Bandura (2000: Current Directions in Psychological Science, 9, 75-78) によれば、集団が認知するエフィカシーを測定する主な方法は2つある。1つは、各メンバーがその集団において実践する特定の機能を達成するための、彼ら自身の個人的な能力の評価を合計する方法である。もう1つの方法は、全体として作用する集団の能力に対するメンバーの評価を合計する方法である。後者は、集団内で機能する協調的で相互作用的な側面を含む全体的な評価である。アイスホッケー選手を対象に研究を行った Feltz & Lirgg (1998: Journal of Applied Psychology, 83, 557-564) は、コレクティブ・エフィカシーの総和は、セルフ・エフィカシーの総和よりも、パフォーマンスを予測することを明らかにしている。

これまでに、コレクティブ・エフィカシーとチームのパフォーマンスには関連があることが示されている (Gully et al., 2002: Journal of Applied Psychology, 87, 819-832)。しかし、コレクティブ・エフィカシーの向上に関連する要因はほとんど明らかになっていない (Tasa et al., 2007: Journal of Applied Psychology, 92, 17-27)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、競技者を対象としたコレクティブ・エフィカシー増強プログラムを開

発することであった。

具体的には、1) コレクティブ・エフィカシーの評価尺度を開発すること、2) コレクティブ・エフィカシーの関連要因や増強方法を検討することによって得られた知見を基にして、最終的に、3) コレクティブ・エフィカシー増強プログラムの開発を行うことを目指した。

本研究の特色・独創的な点は以下の2点である。1) わが国では、競技者を対象として、コレクティブ・エフィカシーを体系的に検討した研究が存在しない(学会発表水準の研究が数件あるのみである)。2) 競技者が自らの所属しているチームに対して持っている感覚を数値化して、具体的に測定することができる。

本研究の意義は以下の4点である。1) 競技者におけるコレクティブ・エフィカシーについての基礎データを得ることができる。2) コレクティブ・エフィカシーの関連要因を明確にすることによって、どの要因に働きかけることがコレクティブ・エフィカシーの増強につながるのかを明確にすることができる。さらに、半構造化面接によって、競技者や指導者からコレクティブ・エフィカシーの増強方略を収集することができる。3) 以上の結果に基づいて、コレクティブ・エフィカシーを用いたチームの評価方法とチームビルディングのための介入方法を提案することができる。4) コレクティブ・エフィカシーという概念は、競技を通じて競技者がチームの一員として機能することを学ぶという競技者教育への貢献ができる。

なお、本研究では、個人が自分の集団について評価するものとして、コレクティブ・エフィカシーを扱った。

3. 研究の方法

本研究の目的は、競技者を対象としたコレクティブ・エフィカシー増強プログラムを開発することであった。具体的には、1) コレクティブ・エフィカシーの評価尺度を開発すること、2) コレクティブ・エフィカシーの関連要因や増強方法を検討することによって得られた知見を基にして、最終的に、3) コレクティブ・エフィカシー増強プログラムの開発を行うことを目指した。まず、競技中の心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーを測定する尺度を開発し、尺度の信頼性・妥当性を検証する(研究1)。次に、コレクティブ・エフィカシーの関連要因を検討する(研究2)。さらに、コレクティブ・エフィカシーの増強方法を探索的に検討する(研究3)。最後に、コレクティブ・エフィカシーを増強するプログラムを開発する(研究4)。

当初の予定は上記の通りであったが、より

広範なデータを収集することと、研究の妥当性を向上させる目的で、50名の者を対象とした調査を追加で実施した。この調査では、コレクティブ・エフィカシーを増強する方略について、自由回答を求めて、その回答を整理集約した（平成23年度の研究成果を参照）。

4. 研究成果

(1) 平成21年度

研究1を実施した。実施に当たっては、心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシー尺度の開発を目指して、大学生競技者を対象とした横断的調査を実施した。調査対象者の招集においては、複数の大学と十分に連携して研究を実施することができた。その結果、忍耐力など10の心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーを評価することができる、コレクティブ・エフィカシー尺度（全10項目）が開発され、信頼性・妥当性も確認された。

さらに、関連学会に参加することで、本研究課題に関連する研究者との意見交換や、関連情報の収集も行った。

(2) 平成22年度

研究2を実施した。実施に当たっては、大学生競技者を対象とした横断的調査を実施した。調査対象者の招集においては、複数の大学と十分に連携して、144名の大学生競技者から回答を得た。さらに、インターネット調査会社に依頼し、全国から252名（有効回答者数）の大学体育会運動部に所属する大学生競技者を招集して調査を行った。その結果、心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシー得点は、性で異なっておらず、非レギュラー選手の方が、レギュラー選手よりも高いことが明らかになった。また、いくつかのコレクティブ・エフィカシー得点は、心理的競技能力の1つである協調性と関連することが示された。さらに、心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシー得点が、集団のサイズ（部に所属している者の人数）と関連することも明らかになった。

なお、本研究成果を導くに当たり、関連学会に参加することで、本研究課題に関連する研究者との意見交換や、関連情報の収集も行った。

(3) 平成23年度の成果

研究3では、近年集団に対する働きかけとして注目を集めている「ファシリテーション」の技法に基づくプログラムを実施した。全国規模の競技大会に出場する水準にある、大学体育会運動部を対象として、ファシリテーションプログラムが、コレクティブ・エフィカシーを増強させる可能性を探索的に検討した。その結果、ファシリテーションプログラムが、「コミュニケーションを取ること

ができた」「チームの雰囲気がよくなった」「考えることができた・再認識することができた」という恩恵をもたらすことが確認された。これらの恩恵は、コレクティブ・エフィカシーと関連していると考えられることから、ファシリテーションプログラムがコレクティブ・エフィカシーの維持・改善・向上に貢献することが示唆されたと考えられる。

さらに、研究4における提案をより具体的にするために、追加の研究として、コレクティブ・エフィカシーの増強方略を自由回答によって収集する研究を実施した。具体的には、50名の対象者から、自由記述および半構造化面接によって、コレクティブ・エフィカシーを増強する方略を収集した。主な結果は以下のとおりである。1)「声かけ」が多く回答された、2)「応援をする」「指導者が声をかける」「円陣を組む」「ライバルを作る」など、競技場面で一般的に行われている行動が報告された、3)「コミュニケーション」や「話し合い」など、対話についての示唆が得られた。

最後に、研究4として、ファシリテーションプログラムを軸としたコレクティブ・エフィカシー増強プログラムを開発した。競技場面では、選手間、選手-指導者間において声かけを行うこと、コミュニケーションが促進されやすい状況（円陣など）を設定すること、ライバルを設定することが有効である。一方、非競技場面においては、ファシリテーションプログラムなどの対話をする機会を設定することが推奨できる。そして、競技場面・非競技場面を通じて、コミュニケーションを取ることの重要性が強調されるべきである。コレクティブ・エフィカシーを増強するためのプログラムが含むべき要素として、以上の提案を行うことができる。

研究3および研究4の実施と並行して、本研究によってこれまでに得られた成果の発表を行った。具体的には、すでに学会誌（体育学研究）に投稿されている研究1が体育学研究に掲載された。さらに、研究2の論文文化を行い、投稿する前段階に到達することができた。

そして、日本心理学会にて研究発表を行い、心理学、教育学、組織学を専門とする他の領域の研究者・実践者とも意見交換を行った。日本スポーツ心理学会では、スポーツ科学領域の研究者・実践者と意見交換を行った。これらの対話によって、研究成果やプログラムに関する具体的な助言を得ることに成功した。

上記の一連の活動によって、本研究で得られた知見を元に、スポーツの現場において活用できる、実施可能性の高い、コレクティブ・エフィカシー増強プログラムの開発に成功することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 荒井弘和、競技者における心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーとその関連要因、体育学研究、査読有、第56巻、1号、2011、pp. 229-238 (doi:10.5432/jjpehss.10041)

〔学会発表〕(計2件)

- ① 荒井弘和、チーム内ライバルの存在はコレクティブ・エフィカシーの高さと関連する、日本スポーツ心理学会第38回大会、2011年10月9日、日本大学文理学部
- ② 荒井弘和、大学生競技者を対象としたファシリテーションプログラム、日本心理学会第75回大会、2011年9月16日、日本大学文理学部

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒井 弘和 (ARAI HIROKAZU)
法政大学・文学部・専任講師
研究者番号：30419460